

胸郭出口症候群の鍼灸治療

平成三十年一月二十八日 青鳳会

講 師 吉 野 久

■ 緒 言

胸郭出口症候群は、胸郭の出口付近で、腕神経叢、鎖骨下動脈・静脈が、鎖骨、第一肋骨、前・中斜角筋、小胸筋などによって圧迫・牽引をうける症状である。これに対する検査法は種々あるが、患者の症状を聞き、患部を触診してみれば、斜角筋、胸の上部筋が緊張していることは明白なので、ここでは特に触れない。

われわれ鍼灸治療家にとって、それ以上に意味があるのは、患者がなぜこうした症状に陥っているのか、その原因だと思われる。それは歯の食いしばりであることが多いようで、そこからは患者の心理面や、生活態度をうかがうことができるが、これについては、後で詳しく述べたい。

Ⅰ. 胸郭出口症候群の症状

つり革につかまる時や、物干しの時のように腕を挙げる動作で上肢のしびれや肩や腕、肩甲骨周囲の痛みが生じる。また、尺骨神経に沿ってうずくような、ときには刺すような痛みと、しびれ感があったり、握力低下、細かい動作がしにくいなどの運動麻痺の症状がでる。

手指の運動障害や握力低下のある例では、手の骨間筋の萎縮が見られ、小指球がやせてくる。

鎖骨下動脈が圧迫されると、上肢の血行が悪くなって白っぽくなり、痛みが生じる。鎖骨下静脈が圧迫されると、手・腕は静脈血のもどりが悪くなり青紫色になる。



II. 病態と原因

胸郭出口症候群は、胸郭の出口付近で、腕神経叢、鎖骨下動脈・静脈が、鎖骨、第一肋骨、前・中斜角筋、小胸筋などによって圧迫・牽引をうける症状であるが、なぜこういうことになるかを考えると、臨床のうえでは夜間に歯を噛みしめる癖をもった患者が多いことに気づく。

噛みしめ・食いしばりの結果、①斜角筋などの緊張のほか、②肩甲間部の凝り、③腰

痛をも起こしているケースが多い。

ひるがえって、なぜ夜間に歯を噛みしめるのかについては、その原因ははっきりしない。まず心理的な要因が考えられるが、その他に顎関節症のある場合、歯列に乱れのある場合などがあげられているが、夜間の噛みしめ・食いしばり、歯ぎしりのある患者が口腔外科などの医師の診察を受けた場合、ほとんどの患者はその原因を特定されていないのが現状である。

Ⅲ. 斜角筋の緊張に対する治療の特異点

斜角筋、その他の胸郭出口付近の筋の寛解治療をめぐって問題となるのは、その寛解が思いのほか厄介だということで、肩井周囲の寛解をめざす以上にむずかしい面がある。これは斜角筋が、一種の深部筋だということに理由があるのではないかと思われる。

深部筋といえば大腰筋をあげなければならないが、こちらは斜角筋にくらべてはるかに大きな筋なので、長く太い鍼を直刺することができるが斜角筋の場合、あまり強い刺鍼もできないので、畢竟、誘導的な治療が求められることになる。

Ⅳ. その他の頸肩部治療にかかわること

もう一点むずかしい肩周囲の治療といえば、肩外兪穴の痛みではないだろうか。

この穴は、肩甲骨内側上角にあり、痛みの原因は主に肩甲挙筋(起始・C1~4、肩甲背神経・C4,C5)であるが、鍼を強刺しても、なかなか痛みの治まらない穴だという感がつよいが、足の肝経を取ることによって対処できる。

※肩甲骨上角に停止するのは、ほかに小菱形筋、棘上筋

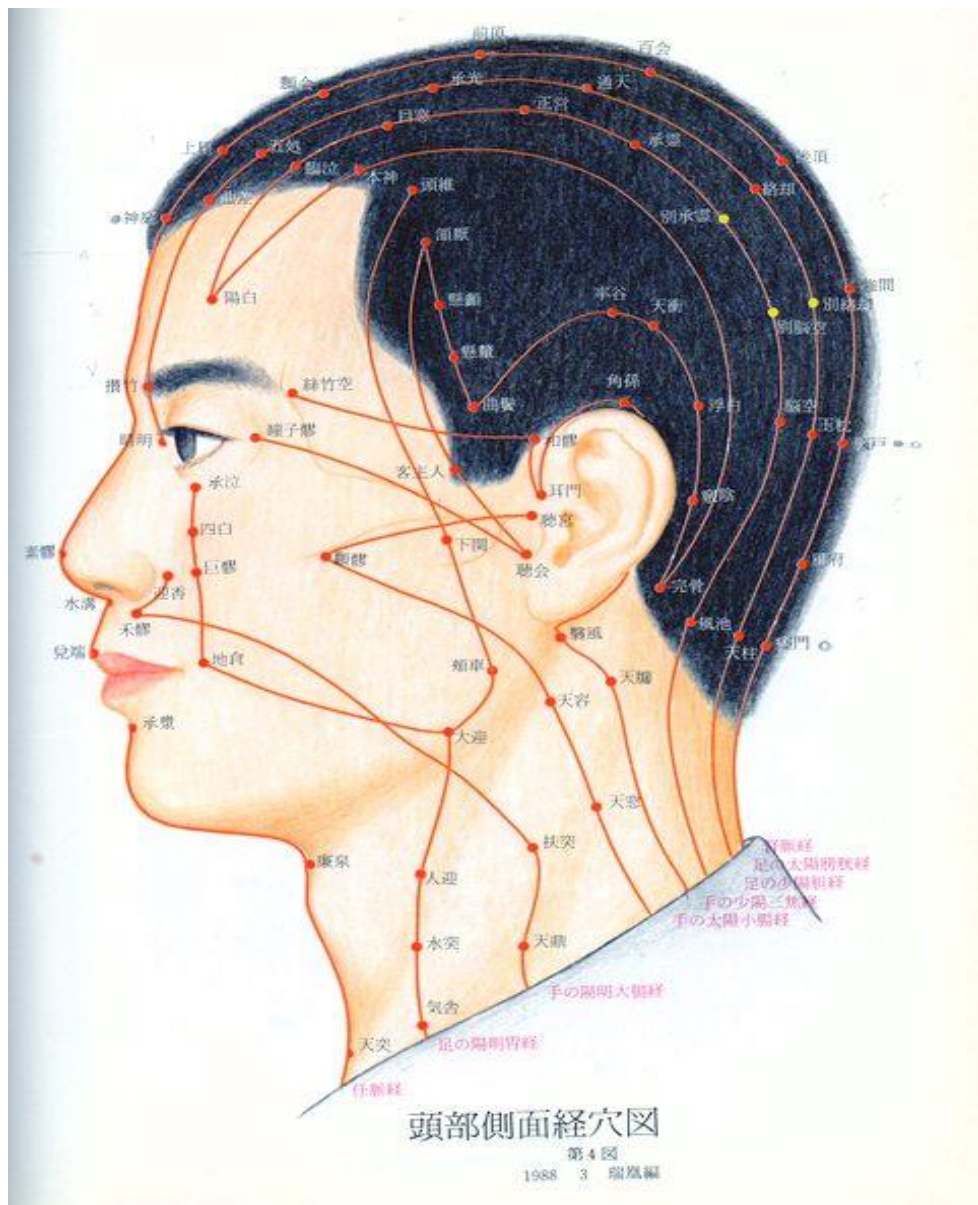
	起 始	停 止	支 配 神 経
前斜角筋	C4~6 横突起	第 1 肋骨	腕神経叢・C5~C7
胸鎖乳突筋	胸骨 and 鎖骨	頭蓋骨乳様突起・上 項線	副神経、頸神経叢・ C1~C2
頸板状筋	TH3~5,TH4~6 横突 起	C1~2 横突起	C1~7 神経
頭板状筋	TH1~3,C4~7 横突起	頭蓋骨乳様突起	C1~7 神経
肩甲挙筋	C1~4 横突起	肩甲骨上角	肩甲背神経・C4,C5

V. 治 療

A. 全般的に身体をゆるめる 帯脈、三里、三陰交

B. 遠道刺を応用した治療

胸筋群		列厥
前斜角筋		内庭、解谿 + 陽谿、遍歴
胸鎖乳突筋・上部	頸、頭板状筋・上部	外関、四瘦 + 丘墟
胸鎖乳突筋・中部	頸、頭板状筋・中部	支正 + 飛陽
胸鎖乳突筋・下部	頸、頭板状筋・下部	内庭、解谿 + 陽谿、遍歴



鍼灸古医書に探る胸郭出口症候群の鍼灸治療

ここでは斜角筋を一種の深部筋と考え、深部の痺を取る治療を考える。

靈樞・九鍼十二原篇第一

毫鍼は、尖ること■(民+虫+虫 ブン か 蚊の正字)■(亡+虫+虫 ボウ あぶ)の喙
(カイ くちばし)のごとく、靜かにして以って徐やかに往かしむ。微にして以っ
て久しくこれを留め、養うて以って痛痺を取る。

官鍼第七

痺氣痛みて去らざるは、毫鍼をもって取る。

病、中にあるは長鍼をもって取る。

〔九變に應ずる刺法〕

二に曰く遠道刺と。遠道刺は病上に在れば、これを下に取り、府の俞を刺すなり。

藏俞を刺す…「一曰輸刺、輸刺者刺諸經榮輸藏俞也」

脈の居る所、深くして見れざれば、これを刺すに微かに鍼を内め、久しく留めて、以って其の空脈に氣を致らしめよ。

脈、淺ければ刺すこと勿れ、按ぜよ。

靈樞・九鍼十二原篇第一

その道を言わんことを請う、小鍼の要は、陳ぶるに易く、入るに難し、■(鹿+鹿+鹿 ソ 粗い、下手)は形を守り、上は神を守る、神なるかな神。(邪が)客すれば門に在りて、いまだそれ疾なるを覩ず、悪くんぞその原なるを知らん。刺の微は速遲に在り、■(鹿+鹿+鹿 ソ 粗い、下手)は關を守り、上は機を守る。機の動くや、その空を離れず、空中の機は、清靜にして微、それ來たれども逢うべからず、往けども追うべからず。機の道を知る者は、髪も以って掛くべからず(気の動く瞬間を知っている者にとって、その瞬間とは髪の掛けられる隙間ほどもない)、機の道を知らざる者は、これを叩けども發せず(たとえ叩いても何も得ることができない)。その往來(氣の往来)を知るには、これに與かり期^まつを要す。、■(鹿+鹿+鹿 ソ)は聞^{くら}きかな。妙なるかな、工の獨りこれを有^もつ。

往くは逆と爲し、來たるは順と爲し、逆順を明知すべし。正行は問うことなく、逆なればこれを奪うべし。追うてこれを濟ませば(往く氣を追って補えば)、悪くにぞ無虚を得ん、これを迎えてこれに隨えば(來る氣を迎えてこれに隨えば)、惡にぞ無實を得ん。

以って意は和^{ととの}えり。鍼の道(について言うを)畢る。

文章が優れているということは、古典書として重要なことであるが、簡古であり、かつ古風な雅致がなければならない。

斯界には靈樞の文章と、孫子の文章が似ているという指摘が広くある。靈樞の簡古な文に触れたついでに、ここで孫子にも触れておく。

孫子・虚實篇第六

其の必ず^{おもむ}趨く所に出で、其の意^{おも}わざる所に^{おもむ}趨き、千里を行きて勞れざる者は、無人の地を行けばなり。攻めて必ず取る者は、其の守らざる所を攻むればなり。守りて必ず固き者は、其の攻めざる所を守ればなり。故に善く攻むる者には、敵、其の守る所を知らず。善く守る者には、敵、其の攻むる所を知らず。微なるかな微なるかな、無形に至る。神なるかな神なるかな、無声に至る。故に能く敵の司命を為す。

出其所不趨、趨其所不意、行千里而不勞者、行於無人之地也、攻而必取者、攻其所不守、守而必固者、守其不攻也、故善攻者、敵不知其所守、善守者、敵不知其所攻、微乎微乎、至於無形、神乎神乎、至於無聲、故能爲敵之司命、

夫れ兵の形は水に象る。水の行くは高きを避けて^{ひく}下きに^{おもむ}趨く。兵の形は實

を避けて虚を撃つ。水は地に^よ因りて行くを制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に兵に常勢なく、常形なし。能く敵に因りて変化して勝を取る者、これを神と謂う。故に五行に常勝なく、四時に常位なく、日に短長あり、月に死生あり。

夫兵形象水、水之形、避高而趨下、兵之形、避實而擊虚、水因地而制行、兵因敵制勝、故兵無常勢、水無常形、能因敵變化而取勝者、謂之神、故五行無常勝、四時無常位、日有短長、月有死生、

「孫子」の作者について

「史記・孫子伝」には、孫武と孫■(月+賓 ひん)の二人の記述がある。古来、孫子とは春秋時代に呉王・闔廬(こうろ 前 514～497 在位)に仕えた孫武だとされてきたが、「春秋左氏伝」などに孫武の名は出てこない。

齊で活躍した孫■(月+賓 ひん)については、戦国末期の有名な兵法家として「史記」の他にも諸書に名が出てくる。

したがって、「孫子」という書物の作者は、孫武ではなく孫■(月+賓)であろうという説が有力だったが、1972年に山東省臨沂県にある銀雀山漢墓から、孫■(月+賓)と関係する大量の兵書が発見され、その内容は「孫子」よりも明らかに新しい物が多かった。この結果、「孫子」は、従来どおりに呉で活躍した孫武によるものという説が、広く採られるようになった。

九鍼十二原篇にはこの他にも、次のように、今日の私たちが鍼をもって治療するうえで、大いに益ある条がある。

夫れ氣の脈に在るや、邪氣は上にあり、濁氣は中にあり、清氣は下にあり。故に鍼を陷れば、脈、則ち邪氣出し、鍼、中なれば則ち濁氣出ずる。(このとき)鍼、大きくして深ければ、則ち邪氣、反って沈みて病、益す。